

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

お 香

平成29年2月第4週放送

西暦五九五年夏、淡路島に一本の“香木”が流れ着いたという記録が『日本書紀』^{にほんしょき}にあります。島の人々が流木だと思って火にくべたところ、たとえようもないよい香りが立ちのぼり、一同^{おそ}畏れを抱き、大和の都^{みやこ}へと運び、朝^{ちやうてい}廷へ献上したと伝えられています。これが、日本におけるお香の最も古い記録です。

時の摂^{せつしょう}政 聖徳太子が、すぐにその香木を沈^{じんこう}香であると見抜きました。太子に香木の知識があったことがわかります。すでにこの頃には仏教が日本に伝えられていましたので、お香の知識は仏教とともに日本に伝わったということがわかります。

仏教が生まれたインドは、多くの香木の原産地です。

お釈迦さまが亡くなられた時にも、香木が用いられています。お釈迦さまを茶毘^{たび}にふす際の薪^{たきぎ}は、あらゆる香料を含むものであったということです。妙なる香り^{たえ かお}がお釈迦さまを包んだことでしょう。

私たちが供養の際にお香を焚^たくのも、この故事が由来となっていると言われます。

お香にはさまざまな種類があります。香木や香料の一つ一つは、それぞれ個性的な香りです。たとえば白^{びやくだん}檀の香りとシナモンの香りの違いは嗅ぐとわかるでしょう。また歯痛止めに用いる丁^{はいたど}字^{ちやうじ}の強い香りや、甘^{かんしょう}松^{くせ}という草を発酵させたような癖のある香りなど、単^{たんたい}体ではあまり好まれないものもあります。

お線香やお焼香の抹香は、複数の香木や香料などを調合して作られています。単体では個性的な香りを調合することで、一つだけでは醸^{かも}し出されない、深みのある香りが作られるのです。

香りについてお釈迦さまは、すぐれた人^{じんかく}格^{たと}の喩^{もち}えとして用いています。

「栴^{せんだん}檀^{しょうれんげ}、タガラ、青^{とくぎょう}蓮^{さいじょう}華、ヴァッシキー…、これら香りのあるものどものうちでも、徳^{とくぎょう}行^{さいじょう}の香りこそ最^{さいじょう}上^{さいじょう}である」

徳のある行いによって醸^{かも}し出される、心の香りこそが、最もよき香りを放つお香なのだと、お釈迦さまは仰^{おっしゃ}っています。

私たちの心の香りは、何によって作られるのでしょうか。それは、私たちが生きる日々ではないかと思えます。すっきりした香りの日もあり、強い香りの日もあるでしょう。また、癖のある香りの日もあり、甘い香りの日もあります。

それらすべてが、調合されたお香が深い香りを醸^{かも}し出すように、私たちの心を作

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

り出すのだと思います。

よき香りを発するお香のように、お釈迦さまの教えに^{みちび}導かれて徳のあるよき生き方をしようとする誓いが大切なのです。

— 終 —